本記事は、BNPパリバ・アセットマネジメント(株)が、(株)日本金融通信社より利用許諾を得て転載したものです。複製・転載・転送等は禁じられておりますのでご了承下さい。

新連載

藤原延介(ふじわら・のぶゆき)
2021年にBNPパリバ・アセットマネジメントに入社し、投資情報を発信。
1998年三菱信託銀行（現三菱UFJ信託銀行）入社後、リッパー・ジャパン、ドイチェ・アセット、アムンディと20年超にわたりリサーチ、投資啓蒙に従事。慶応義塾大学経済学部卒。

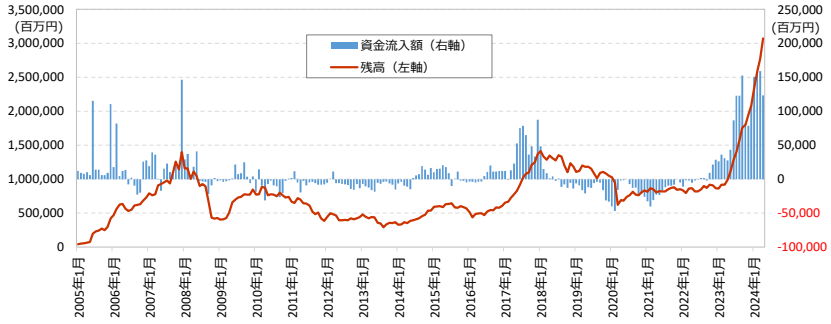
この度、「ファンド市場ハイライト」というタイトルで投信市場のホットな話題を月１回解説させて頂くことになりました。第１回目は、人気沸騰で資金流入が続くインド株ファンドを取り上げます。

2022年夏頃から資金流入に転じたインド株ファンドですが、直近の24年４月末時点の残高は3.1兆円と、初めて２兆円に達した昨年12月からわずか４カ月で３兆円の大台を突破しました（**図表１参照**）。資金フローは22年10月から19カ月連続のプラスとなっていますが、足元では５カ月連続で1,000億円を超える資金流入を記録しており、インド株相場の値上がりと大規模な資金流入が残高を大きく押し上げています。過去に遡ると、日本で初めてインド株ファンドが誕生したのが04年９月で、金融危機前のピークとなった07年12月に1.4兆円、さらに17年頃にもインド投資の人気が高まり18年１月に再び1.4兆円の残高に達していました。しかし、今回のインド株ファンドの人気はこれらの時期を大きく上回るブームになっていると言えるでしょう。

インド株の魅力は、勤労世代が多い人口動態や、国としての発展段階を背景とした更なる高成長への期待です。インド株ファンドが誕生してから20年になろうとしていますが、当時からそのストーリーは大きく変わっていません。インド株ファンドも、金融危機などのグローバル市場の影響を受けながらも、その人気は根強いものとなっています。足元で、資金流入が大きく加速しているのは投信市場全体のトレンドによる部分もありますが、この20年間でインド株投資の選択肢が増えていることもその１つの要因と考えられます。

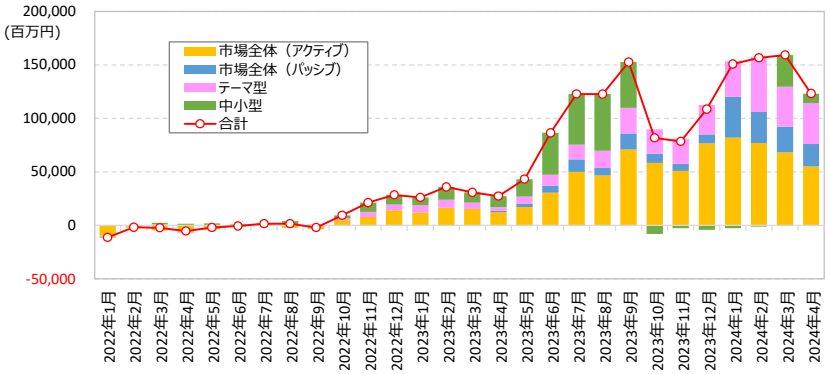
図表２はインド株ファンドの資金流出入をタイプ別に集計したものですが、今回の資金流入局面で特徴的なのは、インド株市場全体を投資対象とするアクティブファンド以外にも幅広く資金が向かっているということです。相対的にコストの低いインデックスファンドの設定が増えたほか、投資対象となる企業が中型株から小型株へと投資対象が広がったこと、さらにはインドの内需に注目したテーマ型ファンドにも高水準の資金流入が見られます。値上がりが急ピッチだったため相場変動が大きくなる場面も予想されますが、インド株ファンドのタイプが増えたことで、個人投資家のポートフォリオにおけるインド株ファンドの活用の幅も広がりそうです。

図表１　インド株ファンドの残高と資金流出入の推移（05年1月～24年4月）



出所:Morningstar Directのデータを用いてBNPパリバ・アセットマネジメント(株)が作成

図表２　インド株ファンドのタイプ別の資金流出入（22年1月～24年4月）



出所:Morningstar Directのデータを用いてBNPパリバ・アセットマネジメント(株)が作成